

三河アララギ

2021年 令和3年3月 弥生

三 月 号

第 六 十 八 卷 第 三 号



ニューヨーク日記(173) <http://blueshoe.copetin.com/>

BlueCat, Shoe Lady

DUCK HOTPOT AT SENKYOUZAN

Blue Shoe Diaries



家族で食べる冬の鴨鍋って良いですね～懐かしい話しながら美味しいお酒も飲みながら。野菜を多く頼むと特に美味しいスープが出来る気がする。シメにうどんを足すのに最高。このお店はお蕎麦屋さんなのだけどね（もちろんお蕎麦もおいし～）だから卵焼きも絶対食べないとです。常盤台にある隠れ家。教えたく無いかも。

Nothing like duck hotpot to catch up with family on a cold night. This restaurant is a soba restaurant but they make this simply delicious duck hotpot with a lot of veggies and mushrooms and make-your-own duck meatballs along with sliced duck meat. That means you end up building this rich and amazing soup that is perfect for adding some udon as the “shime” to finish the meal. The restaurant is hidden away in Tokiwadai which may be difficult to find if you’re not local and I think the regulars like to keep it that way.

目次

第六十八卷第三号(通卷八〇七号)

表紙・土筆 今泉 由利(1)

ニューヨーク日記(173) Blue Shoe(2)

アカンサスの徑 御津 磯夫(4)

かぜくさ 大須賀寿恵(5)

歌集「續々草々」 今泉 米子(6)

は・きくさ 岩瀬すゞへ(7)

余蘊 岡本八千代(8)

道真公 弓谷 久子(10)

聖観音菩薩 今泉 由利(12)

手作りお節 安藤 和代(14)

天気予報 清澤 範子(15)

悟りとは 伊藤 忠男(16)

初詣 矢崎 直人(17)

神棚 森岡 陽子(18)

豊川の魚 白井 信昭(19)

おお大根 杉浦恵美子(20)

縁側 山口千恵子(21)

年末年始 夏目 勝弘(22)

『いんよせ』 いーはこぶ

稲吉 友江(24)

鈴木美耶子(24)

吉見 幸子(24)

牧原 正枝(24)

森 厚子(24)

山崎 俊子(25)

三田美奈子(25)

水野 絹子(25)

牧原 規恵(25)

現代学生百人一首 東洋大学

新井 薫乃(26)

白石 華鈴(26)

石橋 学(26)

吉野 愛香(26)

榎本 莉奈(27)

小川 璃乃(27)

伊藤 香(27)

松田 北斗(27)

森岡 陽子(28)

贈呈誌

童謡『ひまわりの咲く丘』

『俳句』

高橋 育郎(30)

山元 正規(32)

田中 清秀(32)

松本 周二(32)

浜田 紀政(33)

重野 善恵(33)

森岡 陽子(33)

植村 公女(34)

木村 歩歩(34)

岩崎あつ子(34)

矢崎 直人(35)

今泉 如雲(35)

今泉 由利(35)

田中 清秀(36)

『酔いの徒然』(1007)

丸山酔宵子(38)

楽しい時間(100)

山本紀久雄(40)

今泉 雅勝(42)

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

本田 勇氣(44)

『江上浩二の独り言』

江上 浩二(46)

漢詩研修(五十三)

平井 茂行(48)

『西光院』

中屋 保之(50)

春來たる

桜台楼主人(52)

西行庵を尋ねる

今泉 由利(54)

芭蕉と子規6

夏目 勝弘(56)

『氷魚』のことから(242)

岡本八千代(57)

編集室だより(二〇二二年一月)

今泉 由利(58)

野菜・果物・まんだら(37)

三河アララギについて

(59)

(60)

アカンサスの徑

御津磯夫

長病みのあひだに枯れし若楓枯れたるままの葉をまだ保つ

夢さめて夜半にあざやかに思ひいづ先の夜に見て忘れぬし夢

天をゆく白き雲にも自由なし春のまひるの空にむきて臥す

わが植ゑし庭松老いて幹高くつやつやとせる寄生木ほをやどせる

白木蓮のたかき梢の花びらはわがまたたきのごとくこぼれつ

三月十八日白山ざくらの咲きそめて歩みとどまる庭の小徑に

ウイグルの上空より一日にとび来たる見えざる塵はわれらの頭上

雨風になびける一木山ざくら花はましろしひらひらとして

沙羅の花しをりしたるは四十八年前比叡にしたがひき赤彦憲吉

夜一夜嵐に耐へしけさのあさ光にゆらぐ山ざくら花

かぜくさ

大須賀寿恵

町中の田の青みどろに動けるは眠り覚めたる田蛙ならむ

海苔を作り海を好みし母なりき墓のめぐりの茅花呆けつつ

黄に萌ゆる田辛子の田の面すれすれにはばたきゆきぬ田嶋なるべし

終業のミュージック鳴り渡るとき君は転任をつひに言ひにき

三十年のはやく過ぎ吾が辞めむ願書出す日の近づきにけり

平めし赤土の原に葉を持たず小笹は黒く花つけて立つ

どの家も芝桜の花植ゑならべ栄えし尼寺の村の面影

畳みかけし蒲団のぬくみ恋ほしくて五分ばかりをうづくまりある

三つにまた六つに蕾ほぐれゆきて今朝貴船菊の開ききりたり

思ひ出しし一つの言葉たちまちにテレビの前に忘れてしまふ

歌集 「續々草々」

今 泉 米 子

奥庭の隅より笹鳴き移りつつ迷ひ鶉はまだ今日も見ず

御堂山の山頂の尖りなごみたり御祖の奥津城春たちにけり

雨の間を出でたる庭に立ちつくす忽ち土筆つくつくつくし

暖かくなる日待ちつつ暖かくなりたる今日はやく疲るる

父祖よりの園の牡丹の若萌えの匂へる中に大き呼吸する

うなか伏すつぼ菫の花の二三株たまたま傳ふ飛び石の間に

並びたる染井吉野におくれつつ一日にきはまる山櫻花

二百年の牡丹の花を剪りとりて木曾の地酒の壺に活けたり

音ありて牡丹花崩る二時間の今日の診療終はれるときに

天気よしと翁ひと言無患子むくろじの若葉のそよぐわが誕生日

はくきくち

岩瀬ずゝへ

竹島口に降りたれば高き松見えて松を目当に永向寺へ行く

本尊の横に並びて愛染明王は囲へる格子のなきが親しき

縫い上げしネルの着物をたたみ居り我が病む時に着むと思ひて

仕入れたる足袋を背負ひておのづから走りて居たり風吹く街を

ガーゼの寝まき一枚売るに五枚仕入れ残る四枚を店に積みおく

札入れて吾が手に落ちし古信楽旅枕の花瓶をさげて帰らむ

珍珠貝のお礼も言はぬまま庭の寒椿の花を切りてもらひぬ

椿活けて信楽の花瓶店に置き折々見つつ店番をする

きく宗のアイスクリームは甘かりき志野の器に大きく盛りて

狂ひ風過ぎたる朝庭隅の食ふには早き夏蜜柑拾ふ

余よ
蘊うん

蒲郡 岡本八千代

まだわれに余蘊よんの人生ある如しうづまき線香漂ようふ中の読書

独り生きる不安と自由のわれにして今日も夕暮れの鐘は鳴りつつ

メ切りの稿を出したるこの夜のひとり団だん樂らんのみなぎる心よ

本はわが友だちにして暮さむよ令和三年目の春日の今より

君逝きてはや三年目の春の日よダチュラの花のこと話したし

美しき白花ダチュラもつひに今は茶色にしほみし細ほそ細ほそ老い姿

一秒一秒がみなわが動作なりゆつくりゆつくりも美うまし動作か

春の雨通りすぎたり空の中ダチュラの花の古い姿のゆれゆれ

だんだんと君を思ふも淡々しくなりたる如くに今日も暮れつつ

今宵また茂吉の歌に詠み更けてはやしらじらと北東の窓

寒き今日もうず巻線香くゆらして本を読みゐるわれのあるかな

春の日々も青うづ巻線香くゆらせて家にこもれる私わたくしにして

コロナ禍に古い人あはれ外出も人と逢ふのも禁止の日々よ

今日もまた小さきわが顔に白マスク誰なのかさへわからなくなりて

独り住む家の中にもマスクする緊張の日々の続くはいつまでか

道真公

豊川 弓谷 久子

千両と葉牡丹活けたり我なりの元旦迎えむ心静かに

奥山の楠の大樹の間より光射し来る今年の初日

座したまま初日浴びをり平穏な世になる事を心に念じ

去年の日記読み返しをり去年の今日も雨がしとしと降りゐたり

妹と姉に逢ひたり夢の中覚めて夜中の雨音を聞く

子に連れられて行きし箱根路のあの道を今選手等は力走しをり

大寒波の大雪の中立往生の車の列をテレビはうつす

子と孫が今日は来りてお年玉くれて行きたり正月もゆく

振袖にマスク姿の成人式よコロナ騒ぎの何時まで続く

少しだけ虫食い跡あり無農薬の大き白菜届けくれたり

丁寧な葉をはがしゆくずつしりと重き白菜漬け物にせむ

伸びし髪子が剪りくれる日向の縁に外出自粛も関はりの無し

新聞にて葦毛湿原読みてをり友等と行きし日憶い出しつつ

奥山に梅咲き初めしか道真公の一生を今日はテレビにて知る

明るい話題無きままむつき過ぎゆけり新型コロナふえ続きゐて

聖観音菩薩

東京 今泉 由利

雨降りぬ風吹き荒れぬ雪積もりコーヒー木の枯れ枯れとなる

自肅とは自身の心に向かふこと彫刻刀と角材をもて

二千五百年前実在のシヤカ族王子様仏陀となられし

桧科桧属針葉樹日本特産肌目良し一刀一刀香り立ち立つ

人間の姿に一番近いとぞわが観音像はわが手にて彫る

彫るといふ一刀一刀重ねつつ桧の香りに包まれをりぬ

彫るといふ動作の随思まにまひ出づ知るを限りの仏陀のことを

まだ数^{かず}へ得る現実の数字かと埋^{うづ}もれるたる桧^{ひのき}木屑^{くず}に

新しき思ひ湧きつつ桧材仏陀となりてゆかれるところ

出家前のお釈迦様がモデルなりと聖観音菩薩像を彫らむとしをり

中国語日本語梵語チベット語漢語ウイグル語トルコ語書写されてをり観音経

左手は花莖長く蓮華の蕾右手に聞き初^そむ花卉聖観音菩薩

怖いこと災の無き手助けを聖観音菩薩像彫らむとす

個別的全ての人に合はする救済一刀一刀偲びて彫らむ

鏡もて自らの首すじ確かむるわが身を加ふ観音様に

手作りお節

豊川 安藤 和代

程のよく切干大根乾ききて真昼の空は白き月あり

本宮を暗くおおいて北の空友住む町はしぐれいるらし

冷えし朝味噌汁旨しと刻み葱山盛り入れて孫はおかわり

南天に千両万両個性みせ花なき冬の庭を色どる

いつもくるヒヨも雀も粉雪舞う今日はいづこに宿しているや

賜わりし大根サクサクなますにと刻む音軽し冬の陽淡し

花言葉々優秀々と言うムラサキハナナ咲く日思いて種おとしゆく

手作りのお節お重の届きたり娘の味よ温き新年

指先程の豌豆葉陰に顔を出し新春の朝を寿ぎてをり

若水を口にふくめば丸き背も心もシャキッと伸びて青春

洗濯物干せば雨降り取り込めば晴れて睦月の空は気忙し

年毎に賀状枚数増え届く喜びの庭満天星芽吹く

天気予報

春日井 清澤 範子

軒下をゆする風にもリズムあり寒さ感ずる今宵吹く風

夜明けと共に小鳥の囀り目をさますひととき鳴いて何処へ行きしか
武者隠し付くる室には出窓あり冬晴れの日の明るかりけり

低気圧高気圧と天気予防士はまだまだ寒し雪だるまと風

わが家三人病院受診が五科にして五日続くよ娘の運転

爽やかな風にひらひら舞ふ桜葉木々の間を吹き抜きてゆく

洗濯の物干すたびに仰ぎ見る柿の若葉の光りてまぶし

鳥の声を賑わしく聞きつつ朝刊の配達さるるを床の中にて待つ

低気圧の通過の報あり今の夜は窓の庇に雨落つる音

時々には姑ははの手紙を読みかえしやさしくありし姑を想ひぬ

悟りとは

大阪 伊藤 忠 男

孫たちに唆されて漢検にトライする羽目後に引けずや

改めて文字に記すがままならぬあやふや知識しる思い知らさる

パソコンのせいにするなり漢字書くことの少なさ余りあるなり

曇り空今にも雨か心には長きにわたり青空が無し

月火星かぐや姫にはエイリアン間近で会える明日の夜には

別宅でサルにイノシシともに棲むコロナ疎開と擲揄されながら

失敗は繰り返すこそ失敗で次に繋がば失敗ならず

節分に南東に向かい恵方巻謂れを信じ心願込める

病院に行くとしてリスク行かぬとて命思えば今何選ぶ

窓開けて朝日取り込む寝起き時我まだうつつ夢の中なり

悟りとは無心の境地我が「のぞみ」なのにあれ有りこれも我ある

初詣

東京 矢崎直人

歩を進む令和三年歩き出す焦らぬように進める一步

牛日の仕事始めの年男お稲荷さんに初詣して

おろしたて靴履き仕事出かけるも足が痛くて帰り中敷き

雲間より白く輝くスカイツリー神々しき白幻想的な

歳時記を捲りて出会う言葉たち繰り返すうち新しき色

どんな花咲かすだろうか薔薇の花接ぎ木に夢の膨らむ夏へ

スタートを押すの忘れし万歩計ポカポカしている陽気

全身で太陽の日を浴びてやる猫には猫の工夫と決意

冬青空地上吹く風知らぬまま静かに青く青く澄みたり

神棚

東京 森岡陽子

年末の神棚の掃除我つとめ注連縄飾る無事にと合わす手

山門を一步入るとうつむきて侘助の花密かに咲きぬ

夜明け方三日月ぼんやり残りをる日々ほつそりと寒さ一しほ

紅梅に枝いっぱいに蕾つくまだまだ堅し春は遠くに

北風の強く吹く道皓々と妨げなき空月美しくし

大寒の空気の中に沈丁花小さな蕾小さく春待つ

真つ直ぐにベットに日差し光り来て潜りたくなる目覚めてしばし

寒禽の鳴く声寂しコロナ禍は一時消ゆる通学路の声

伸びをして大欠伸してお腹せして春遠からじ老犬甘ゆ

豊川の魚

豊川 白井信昭

秋のジャスミンそのまま冬のジャスミンとなりその白花の華やぐ門口

孫匠真と妻を伴いてぎよぎよランド久久に遭う豊川とよがわの魚

若き頃妻子伴い来し日より今日という日の幾年ならん

いきいきと群泳ぐ回る川の魚円筒形のガラス張り水槽

朝焼けの遠く山並み初日の出ぐんぐんあがるま赤き太陽

東ひんがしの階下の小窓日輪の日の光今し我に届きたり

年明けの赤きバラの花垣根上なほも咲かんと門口を見あぐ

静けさのこのレストラン初めてのが五人たりのみ窓側の席

七草粥今日という晩妻と食む無病息災ことさら思う

おお大根

蒲郡 杉浦恵美子

松の内飾りし牛車の置物を惜しみて仕舞ふ母の干支にて

松の内山里ならねど我が住処賀状以外は訪ふものもなし

誰も来ぬならば出掛けんハンドルの赴くままに表浜海岸

ゆるゆると坂を下れば光る海水平線は涯なく続く

コロナ禍も孤独も何も呑み込んで水平線は百八十度

訃報のみの叔父との別れコロナ禍はちゃんとさよならさせてくれない

おお大根袋破けて階段の下までどどどと転がり落ちぬ

土付きし大根胸に抱ふれば何やら愛しじつくり炊かん

戴きし大根あまりにでっかくて我が俎板になど到底乗らぬ

奥書は大正十年装幀の苺のデザイン今なほ斬新

この本が世に出て丁度百年目コロナ禍の刻こんな出合ひも

縁側

豊川 山口千恵子

丸々の赤きリングをもらひたりみがき光らせ香りたのしむ

靴下の破れを一足つくろひぬぬくぬく足にこち良きかな

ふはふはと後から後から降る雪よ地面に落ちればたちまち消える

窓の外の楓の紅葉散りはてて種実つきある冬木となりぬ

槇垣の根本にぽつぽつ咲きはじむ水仙とりぬ清しき香り

朝より細く冷たき雨の降る雪にはならざりこの冬の雨

わが組の秋葉神社の寄合に集ひてお礼貰ひて帰る

正月を何処へも行かず家こもる客も来たらずわれら二人に

数少ない年賀状をくりて見る日差しあたたか縁側に来て

わが庭の南天赤く紅葉せり房実はすでに小鳥に食はれ

年末年始

豊川 夏目勝弘

抜きたてのワケギ水菜を両の手に重く提げて帰りきにけり

三ケ日の野菜の心配なくなりぬ助けてくれる人多くして

コロナ禍にて時間の余り年賀状の七十枚を手書きにしてゆく

年賀状あて名書きつつその友の顔のたしかに浮びくるなし

年賀状を辞める人の多くなり生かされてゐる証明なりけり

一日を一生として生きてをり年末もなし新年もなし

目の覚めて時間たしかむ携帯にて令和三年の元旦の闇

三ケ日過ぎて米研ぐ水道の水の痛さにも馴れてきにけり

今もまた過去となりゆく止めがたし止どまることなし平凡でよし

過去なるを思ひ運ぐらすは何故か年末年始のいと多くして

過去なるは消滅するなし物置の隅に置きて忘れゐしもの

コロナ禍もたちまちにして過去となり物置小屋の忘れモノになれ

大寒の去りて立春居座はるはヤツカイモノのコロナ菌なり

ネギキャベツ求めて行くはスーパーならず家庭菜を楽しむ人ぞ

手作りの塩コウジをば持ちて行くネギとキャベツとの物物交換

食料の自給率は30%その国にて生かされ野菜にめぐまれてなる

朝あさの野菜の剪りクズ100g余出汁を取りて味噌汁作る

『ハルよせ』

西浦公民館 いーはとぶ

わが胸の小さき願ひ叶はぬ夜「はやぶさ2」の帰還を知りぬ
黄金の蝶舞ふごとにして公孫樹の葉夫と眺むる里の夕暮

稲吉友江

目高たちバケツ一杯に売られぬる小さき命よ赤きも黒きも

鈴木美耶子

今はまだ会へる日いつとは言へぬまま今宵も受話器静かに置けり

静かなる六角堂の門前に「花を生けよう」のポスターに見入る

吉見幸子

七夕会たなばたえ華道展にて祈り込めコロナ終息に白き桔梗生ける

眼の前に野良犬一匹たちふさぐ何とかにらみ何とか通る

牧原正枝

でこぼこにセメン吹きつけしこの土手を孫はかけ登る「デイズニーみたい」

コロナ禍に歌会なけれど「いーはとぶ」集ふがごとく夢想する午後
今は亡き父や祖父母の言ひしこと床にて思ふ夜明け待ちつつ

森 厚子

高き枝に小さき黄の柚子七つこの冬の湯に手足のばさむ
日の高さたしかめて庭の草をとる冬の陽さしたる温きまにまに

山崎 俊子

「弁慶の足跡」といふ大岩ありき刑原城址の南の磯浜

三田美奈子

形の原と三河大島を跨ぎたる「弁慶の足跡」の岩いまは何処に

体調を崩せし因もとは親子げんかと言ひ張る母に我はホツとす

水野 絹子

嗚呼あの日声掛けもせず別れしをうすき香煙我に漂ふ

コロナ禍も異常気象もわが庭の千両万両あざやかにして

牧原 規恵

いにしへの歌人のやうに万葉の道をたどりて伊良湖を眺む

現代学生百人一首

東洋大学

ひこばえの青々とした姿みていまを生きると背中おされる

埼玉県立川越総合高等学校三年

新井 薫乃

「なんでもない」強がりすぎて離れてく寂しい顔した本当の友達

埼玉県立坂戸西高等学校三年

白石 華鈴

流行りモノ興味がないという祖母のはやばや飲み干すタピオカドリンク

埼玉県立南陵高等学校三年

石橋 学

ごうごうと新米乾かす音がする我が家の秋はここから始まる

埼玉県立松山女子高等学校二年

吉野 愛香

迎え火の昇る煙と空見上げ優しき祖父におかえりなさい

志木市立宗岡中学校三年

榎^{えの}本^{もと}莉^り奈^な

おめでとう妹祝う誕生日こっそり祝う姉になった日

埼玉県立西武学園文理高等学校一年

小^お川^{がわ}璃^り乃^の

ママ抱っこ帰る私をうばいあい足がよろめく至福の時間

千葉県香取郡市医師会附属佐原准看護学校一年

伊^い藤^{とう}香^{かおり}

風変わり冬のけはいに思い出す祖母の横顔かな病室

千葉県立芝浦工業大学柏中学校一年

松^{まつ}田^だ北^{ほく}斗^と

贈呈誌

森岡陽子

青森アララギ 第四百十三号

- 奥尻島おくしりの岩の隙間にヒナ待てばイソヒヨドリはエサ啜へ来る
内山愛子
- 青空の真なかに細き昼の月休憩中の庭師と仰ぐ
竹洞早苗
- 台風の名残りの風に揺れやまずここだ散りしく秋海棠の花
三上信子
- 荒れし海なぎて磯辺に流れくるワカメを村人競ひ拾ひき
岩田鶴枝子
- グダリ沼の清き流れは変らねど梅花藻の姿つひに見るなし
木浪みつゑ
- あかあかと窓に映れる漁火を遠くに眺む恵山の湯宿
浜田清勝

冬雷 2021年 2月号

○中天の陽光を受け薄粧うすけはひ眩しき富士にかかる笠雲

○藤の葉の一日で散り窓に映る幹の黒々蛇の踊ること

○あらかたの葉を落したる桜の枝ことごとく冬の蒼空を差す

○暖簾のごと名産柿は吊るされて駅のホームに小春の日差し

○畑なかにほほづき一畝のこされて炎暑つづきの夏よみがへり来る

○枝に張るくもの網には霧おりてレースの如し冬となる朝

○店閉ぢし百貨店の白壁に這ひ広がれる蔦の紅葉

○黄菊咲く野菜畑のそちこちにただ野放図に乱るるままに

○揺れ動く穂芒ひかる砂の道海の夕日を背にして歩む

有泉 泰子

水谷 慶一郎

田端 五百子

倉浪 みゆ

古嶋 せい子

内垣 米子

佐藤 靖子

板倉 巴

「ひまわりの咲く丘」

高橋育郎 作詞

ひまわりの丘は おひさまの丘

明るくまばゆい ひかりの丘

ひまわりはおひさまが 好きだから

うれしくなって 友だちになりました

小鳥もいっしょに よろこびの歌をうたっているよ

ひまわりの丘は いつもニコニコ

笑顔が大好き 元気な丘

ひまわりはひかりの輪 輝きの花

朝から晩まで おひさまと歌います

みんなもいっしょに しあわせの歌をうたいましょう

ひまわりの丘は 青空の丘

見あげてみようよ 高い空

天使たちがとんでいる 呼んでみよう

つばさをひろげて 舞いながら降りてくる

しあわせ色の 花束の香に包まれましょう

「ひまわりの丘は 悲しみとお別れする丘です

あしたのよろこびを 迎える丘です

みんなでとこしえの幸を 祈る丘です」

『俳句』

池普請小さき空を残しけり

山元正規

乾びたる罅美しき池普請

泥底を漆光りに池普請

赤々とカーテン染めて初日の出

田中清秀

白磁器挿すひともとの梅の花

流れ藻の寄する渚や春隣

まつ直に畦道を行く初御空

松本周二

枯れ伏して明るくなりぬ葛の原

大雪を載せトラックの帰りきぬ

恋綴る日記帳捨つ大晦日

浜田紀政

ニューシネマパラダイズ観る小晦日

鎌倉の山動き出す春隣

日当りの窓辺に遊ぶ初雀

重野善恵

落葉樹冬の境内空広し

木々の芽に春を囁く気配あり

早梅の紅の覗けしこぬか雨

森岡陽子

木の段の窪みに濃きの冬すみれ

赤い実を落して遊ぶ初雀

疫病のヒソヒソ話冬青空

植村公女

蹟いてオットトット初雀

東京の蒼空続く三ヶ日

初詣露店にはしゃぐ吾子二人

木村歩歩

風花や川面に消える手向け花

白隠の達磨が睨む冬の朝

冬銀河無量大数星あらん

寒紅を入れし友禅袋かな

岩崎あつ子

みどり児の寢息やさしく年新

小半日素顔で過ぎし女正月

新装の窓にきらめく冬の星

新地とは北の大阪雪模様

青々と冬青空の青静か

矢崎直人

仰向けに伸びたる猫の小春かな

冬満月歩める道の白く照り

吹雪の夜の高木恭造眼科跡

今泉如雲

田酒てふ酒の粕入れ根深汁

冬至湯に津軽のひばの木片も

大根の千に未たなく千六本

今泉由利

一粒にひとつ太陽実南天

冬籠りバランスボールにゆらゆらり

石神井の池よりいでて春の川

お社の四手を靡かせ桜東風

続き来し億年万年銀杏いちご咲く

かさね吟行会

「吟行会が中止になったので⑤」 1月

田中清秀

新型コロナウイルスの感染拡大がまだまだ続いている。東京都及び隣接三県に緊急事態宣言が発令され不要不急の外出が制限された、令和三年正月の吟行会は残念ながら中止となった。昨年十月に続いて五回目の中止(前は台風の影響)である。日本だけでなく世界的な規模で感染が拡大して、パンデミックが起こっている現状では止むえない。

昨年の二月三日に大型クルーズ船「ダイヤモンド・プリンセス」が横浜港に入港、香港からの乗客に新型コロナウイルスの感染が分かった時から始まった。早くも一年が過ぎた、当時はこのような事態になることは誰も想像できなかったと思う。そもそもウイルスとは何なのか、生命の最小単位である細胞を持たず自己増殖しないことから生物かどうかの議論がある。遺伝子だけは持っているので感染して人間の細胞内に侵入し増殖して病原体となる。発熱や組織障害を起こし、死に至らすから恐ろし

い。打つ手はマスク着用や頻繁な手洗い、三密回避などが今言われている最善の予防策で何ともやっかない代物だ。

コロナ禍の「禍」はわざわいの意で人びとに被害を与えていることを表している。戦禍や輪禍、舌禍などで使われているが、災でなく禍には人間の営みによって起こされるものが含まれる、との解説がある。禍の字に示偏(神を表す)が使われているのは人為なのか天意なのか、考えると複雑で何とも奥深い。また、収束と終息の言葉もよく使われているが多少意味合いが違うらしい。「混乱が収まりを見せる」意味は前者で、「絶えてなくなること」を表すのは後者、やはりコロナ禍には終息を使う方が希望を持って良い。一月末時点で感染者数は減少傾向にあるが、政府はもう一ヶ月程度の緊急事態宣言の延長を検討している。

コロナ禍を俳句で使うのは良いのかどうか、調べて見るとかなり多くの句が詠まれていた。ただ、川柳の方が多く使われているようだ。豆撒きでコロナを退散させる、マスク美人の古女房に惚れ直したなどのユーモアな句が多いが、中に感染防止の切り札と言われるワクチンの句「ワクチンはみな舶来よ冬母」というのがあった。季語

の冬苺は食べられるが甘くなく不味いらしい、その意味が分かるとなかなか面白い。

話を變えて、正月と言えばやはり富士の山であろう。「二富士、二鷹、三茄子」は縁起の良い初夢と古くから言われている。「晴れてよし、曇りてもよし富士の山、もとの姿は変わらざりけり」は幕末の三舟と言われた山岡鉄舟の詠んだ歌。遠くから眺めて美しい富士山は日本人だけでなく外国人の観光客にも人気がある。また、「一度も登らぬ馬鹿、二度登る馬鹿」とも言われる。私ごとながら、若い頃と二〇一五年と一八年に通算で三回登頂した馬鹿である。登る前の期待と不安、狭い山小屋の宿泊そして明け切らぬ暗闇の出立、急な岩場の危ない登坂、眼下に輝く夜景と満天の星空、頂上の鳥居をくぐった時の達成感、そして山頂から望む御来光の美しさ、やはり登らぬと富士山の良さは分らないと自負している。



富士山頂からの御来光

『酔いの徒然』(二〇七) 丸山 酔宵子

『新型コロナ禍の銀座の師走模様』

新型コロナ第三波襲来が連日報じられ、12月28日から「GOTOトラベル全面中止」が発せられた。今年も2月頃までは、銀座5丁目みゆき通りの風月堂ビルにあるビジネスセンターにはほぼ毎日、午前中はそこで打ち合わせなどをしていたが、この新型コロナ禍で、最近は三密を避け、恐る恐る週2日程度。

昼食は、いつも日比谷か有楽町あたりで取るのだが、よく通った有楽町の老舗中華料理「慶楽」は閉店してしまった。20代のところから通っていて、「牛バラ肉そば」が好みで豆板醤をベースにした辛みで味を整え硬めの麺を喰うのである。前日の痛飲で二日酔いの日には、熱々の「野菜粥」をサーサイと一緒に啜ると生気が蘇りまた今夜も頑張ろうと元気になるのであった。

最近のお気に入り、ソニー通り裏手、銀座6丁目能

楽堂ビルにあるトンカツ「トン喜」。大きな真四角の看板に「トンカツ」と表示されているビル地下、11時半過ぎには階段に行列ができるほどで、19席しかない店内は、しつかりと換気とソーシャルディスタンスを保っている。いつも「ロースかつ定食」を頼むが、トンカツそのものの味は勿論秀逸であるが、このキャベツの千切りが堪らなく美味い。元々、トンカツには醤油派でキャベツの千切りも醤油で食べるのが好きであったが、このキャベツ盛りの下には、絶品のマカロニサラダが隠されていて、醤油との相性が抜群なのである。また、豚汁風の味噌汁と味付けの良い漬物もついて1、100円也で大満足。「ヒレカツ」「カキフライ」「エビフライ」も当然美味いが、「カツ丼」も同じように大人気アイテムである。因みに、目黒の老舗「とんかつ とんき」とは全く関係ないとのこと。

午後は折角銀座に来たのだからと、日比谷か有楽町、銀座のロードショー館で、事前にヤフー映画検索で狙いを定めての映画鑑賞である。コロナ禍の最近の映画館は三密を避ける工夫は万全で、入館時の検温も徹底してい

る。密閉空間と思える劇場内の換気についても当局の厳しい指導で、上映中3回にわたる完全換気が機械的に行われているのだそうだ。

映画が終われば、日も暮れていて師走の冷たい風が首筋に差し込んでくる。コートの襟を立ててネオンが灯り始めた銀座を歩いて行けば、マスクをかけ足早に行き交う人ばかり。あれだけ買い物袋を提げて跋扈していた外人客の姿は皆無。

閑散とした銀座4丁目三越のライオン像にも赤いマスクが掛けられている。和光を曲がって、いつも立ち寄る3丁目の「ウォーキングインバード」へ。バーテンダーの大庭さんが透明シートをめくって検温計を向けながら、「アーツ、良かった……。今日は、柄長さんがはじめてのお客ですよ……」

トンカツに醤油垂らしてマスク取り

酔宵子

楽しい時間 100

山本紀久雄

2021年1月号

九代目市川團十郎・・・其の六

中昭和59年（1984）11月、十二代目市川團十郎が、山梨県市川三郷町の歌舞伎文化公園を「市川家発祥の地」であると認定し記念の石碑を建立したが、劇評家の金沢康隆著『市川團十郎』（1962刊 青蛙房刊）では「系図作成者流の粉飾にすぎない、はなはだ不信用なものである」と断じ、疑問を呈しており、その根拠を次の二点から指摘する。

●一つは初代團十郎が興した「荒事」芸の本質背景からの疑問と指摘である。

●もう一つは系図作成の背景に「勝扇子」事件が存在し、市川家系図の発見につながるのだと指摘する。

一つずつ解説して行きたい。今号では、初代團十郎が創設した「荒事」芸、その本質からの究明である。

江戸歌舞伎では初代團十郎以前から「荒武者事」と呼ぶ演技類型（パターン）が形作られていた。文字どおり荒々しい武者が経ち回りをする演技で、敵役系統のものと、奴系統のものがあつた。

初代はそれらを統合し、敵役をやつつける正義の味方として演じる、新しい荒武者事を創始したのである。この頃の江戸は、各地方から集まってきた武士階級と、周辺の農村地帯から流入してきた人たちが群がる新興都市であり、殺伐とした空気が満ちていた。

この江戸気分の中における一般的な「荒いこと」の演技と、初代が創めた「荒事」との決定的な違いは、後者が、主人公が大切（二日の狂言の最後。大喜利ともいう）に荒（現）人神の分身となつて立ち現れる、いわゆる「神靈事」の演出を構成したことであつた。初代が荒事を創めたのには、大事な理由・背景があると指摘する。

《團十郎も、多くの芸能の人びとと同じく、在所の神の昔を語りつづけてきた語り部の末であつた。村人たちの信仰が薄れるに随ひ、故郷をはなれ 江戸という大都会へ流れ出て、都会の人情を語ろうとした家筋のつとして考えるのが、いちばん穩当な説ではあるまいか。そして、市川流の荒事というものが、その家の職業の昔が、いくぶん変貌しながらも、われわれの生活のうちに根強く残っている魂の故郷を揺さぶり得る力をもっているのは、そういう理由からであつた。》

荒事を上演した場合、市川團十郎は、技芸以上の力を、はじめて発揮するのであつた。そして、根元市川とよばれ、市川流が、他の俳優たちにはない神秘感を観衆に与え、庶民の代表者、象徴という信仰を得るに至つたのは、その職務において正統派的伝統を團十郎の家系が確固と踏まえていたからにはかならない。また、それよりほかに考えようはないのであつた》

この証明ともいえる実態として、

《市川團十郎の荒事の版画が、しばしば悪魔除けという意図の下に家々の門口に貼られた事実は、團十郎に關して、庶民が懐いていた感情のいつわらぬ現われであつた》

と述べ、荒事発想背景に、その父母先祖たちが営んでいた生活が存在したと強調する。

《團十郎は、下総市川村の産と考えるのが穩当であろう。團十郎が、この附近の村々を廻つた語り部の末流であることは、ほ

ば間違いない事実として信ぜられる。団十郎がこのあたりの村々をまわる田舎廻りの劇団を主宰しているうち、ある動機によつて中央劇団へ進出したのではなからうかという想像が、かならずしも無謀ではないということが、種々の理由から説明されるのであるが、この想像には都合のよい記事がある。

その記事とは、文化文政ごろ書かれた『古今雑談思出草紙』（栗原東随舎著）だという。

『歌舞伎役者市川団十郎家伝の事』の項の内に、葛飾郡市川村の薦の十歳の子小三郎はひじょうに敏達な性質であつたが、市川村へ来た田舎廻りの歌舞伎役芝居の群れに投じて田舎廻りをしていけるうち、段々に上達して、二十七歳のころは、市川団十郎と改めて田舎芝居の立者となつた」とある。

このように金沢氏は、初代が「語り部の末裔」であつたことを重視し、「語り部の末裔」だからこそ発したのが荒事であるというのである。

《庶民が、市川団十郎を、その生活の上に直感していたのは、その演技力というよりも、むしろ「荒事」という、精神生活に直結する演出に關してであつた。

「荒事」は、俳優が神の示現を見せる演技が本来のものであると思う。神霊が現われるミアレ（筆者注 御生れ 神・賣人の誕生・來臨をいう）の意味で「アラゴト」と命名されたに相違ない。荒人神（現人神）のもつ「荒」の意味が、すなわち、荒事の荒であることは容易に納得できよう。

これに「柱卷の見得」と称する演出が効果的に加わつた。

《神霊の示現を観客に見せようとする意図を荒事が、その演出のうちに蔵しているところはきわめて多く発見されるのであるが、はつきりと、神の出現を感じさせることができるのは、「柱

卷の見得」と称する演出の技法であろう。

歌舞伎の演出のうちでも「見得」は、その瞬間の演技内容を象形化したものであるため、非常に印象深いのであるが、なかでも、「柱卷の見得」は特別の意義を含んでいる。

この見得は、立木

や柱に両手をかけ、右足（あるいは左足）

をからんで見得をきる

のである。そして、

この見得にかぎつて

は、座頭、つまり一

座の主席俳優にだけ

しか演ずることが許

されなかつた。由緒

正しい家系に属する

神人だけが、神をあらわす、すなわち神霊をよびくだす資格

を備えると考えられたのは古代からの伝統であつた。（写真は「鳴

神上人」の柱卷見得

そこで、神人が神を示現したがたと考えられた柱卷の見得

は、その縁起を忘れかけた後の世までも門閥の座頭にかぎつて

許されるという伝説だけは大切に守られつづけた。芝居の演出

の背後にはこのように、いつも深い理由があるということを、わ

れわれはもつと考究してみる必要があるう。

しかし、この金沢氏の見解には、確かな論拠が存在しないと

いう欠点がある。

だが、もうひとつの指摘項目である「勝扉子事件」は、江戸

町奉行の裁判結果記録という史料があり、そこには鎌倉幕府成

立からの歴史が背景に横たわつている。次号で展開したい。



絹の話 (124)

「アトリエテレビ」今 泉 雅 勝

レイヨン（人絹）の誕生

フックの予言

弾性の法則（フックの法則）で有名なイギリスのロバートフックは1664年（イギリスではニュートンが万有引力を発見し、フランスではルイ14世の華やかな時代、日本は江戸時代前期＝元禄文化の起こる少し前）蚕が糸を吐くのを見て人造絹糸の可能性を予言したのです。

それから200年近く経た1855年（日本では日米和親条約の結ばれる安政年間）スイスのオーディアアが桑の木の皮のセルロースから人造繊維を作り、イギリス特許を取得し、アーティフィシャルシルクと称する人造繊維を作り始めました。

ヨーロッパの蚕が全滅

19世紀になるとフランスを中心にしたヨーロッパ全域に蚕が繭を作る前に病死す微粒子病が蔓延し、猛威をふるいヨーロッパの絹生産は苦境に陥ってしまい、その需要を中国からの輸入に頼りましたが、1839～42の

アヘン戦争で清朝が混乱し、中国から順当な輸入が出来なくなっていました。

しかしヨーロッパの産業革命の成果で新たな富裕層が台頭し、絹需要は高まるばかりでした。

パストウール研究所

ヨーロッパの蚕糸業の要請を受け、フランスのパストウール（ワクチン開発や予防接種などを広めた）は微粒子病は菌類の一種が蚕の中に入って増殖することを突き止め、1865年予防方法を開発しましたが、同じ研究所のシャルドンネがイギリスのスワンの *crificial silk*（人造絹糸）の研究（イギリスの人造繊維製造の特許を取得し、1885年（日本では鹿鳴館時代）のロンドン発明博覧会に出品されたが実用化には至らなかった）の後を引き継ぎ、シルクと見紛うばかりの光沢がある「レイヨン」(Rayon＝光る繊維)を完成させ、1889年のパリ万博に出品され注目を集めました。

第1次繊維革命（各種レイヨンの発展）

1891年ブロンナーにより綿花の綿をとった残りの種に付着している毛綿を使って作られた人造繊維がキュプラ（ベンベルグ）レイヨンが作られました。

1892年、木材のパルプを原料とするビスコースレイヨンが誕生し、1909年にはイギリスのコートール

ド社が本格生産を始めました。また第一次世界大戦時に飛行機の塗料に塗られセルロースアセテートがアセテートレイヨンに發展して行くのです。

日本のレイヨン史

日本では1905（明治38年）東京と京都の糸商が共同してフランスやドイツから輸入したのがはじまりです。

その当時ヨーロッパではレイヨンをアーティファイシャルシルクと言っていました。日本では人造絹糸と訳されました。1914年第一次世界大戦が始まるとレイヨンの価格は暴騰し、1915年日本で初めてレイヨンが後の「帝人」で作られ、続々とレイヨン生産会社が生まれましたが、1918年戦争が終わるとレイヨンの価格は暴落し、生産会社が3社に再編成され、その1社が現在の旭化成です。

レイヨンの特徴

- 1) 光沢あり：絹のような乱反射による柔らかい光沢とは異なる。
- 2) なめらかでドレープ性に富んでいる。
- 3) 熱に強く、静電気を起こしにくい。
- 4) 焼却しても有害物質の発生がない。
- 5) 濡れると強度が1/3になり縮む。摩擦に弱くシワになりやすい。

洗濯は短時間で中性洗剤で押し洗い、陰干し。
スチームアイロンは厳禁。

- 6) 絹に比べて重い。

第2次繊維革命

ナイロン（Nylon）がアメリカのデュポン社のカローガスによって1935年に発明され、蜘蛛の糸より細く、鉄鋼よりも強い繊維と称され、繊維の錬金術とも言われ、1938年には本格生産が始まりました。これ以降はアメリカは日本（農林省・NAC）から絹を輸入する必要がなくなる、という意味を込めて命名されたとも言われています。その後石油を原料にしてポリエステル、アクリル、ポリウレタなど各種の合成繊維が作られて今日に至っています。

繊維を制する者世界を制す。

中国、日本の絹。イギリス、インドの木綿、アメリカの木綿。イギリス、アメリカ、日本の合成繊維の歴史は関わる国々の盛衰を物語っていないでしょうか。

合成繊維は終始絹を手本に作られてきましたが、未だそれには及びません。特に機能性面、環境面では絹に勝る繊維は見当たりません。

本田カイロプラクティック先生の春夏秋冬

本田 勇氣

2021年2月1日

ちよいと考えて

朝方 お隣の屋根の上を見ますと
霜が降りていました

その霜をお天道様が照らしてしまっ

きらきらする様は何とも言えない神秘的な光景でした

今に始まったことではないんですが

身体の症状をネットで検索して

御自身で病名などを決めつけられる方がいらつしやいます

それは決して悪い事ではな

心配から身体に興味を持つのは当たり前のごとです

ただ全てに言えることですが

ネットの情報全てが正解ではないとらういふのです

ネットの情報+思い込みは

時には洗脳的な頑固や意固地につながり

良い事も良くならなかつたり

正しい事が伝わらなかつたり

治るものも治らなくなる場合もあります

そんな考えもあるのか

という二つの考え方として参考にするくらいが

丁度いいのかもしれない

バランス良く 柔らかく 穏やかに

今日も笑いながら行きましょ

2021年1月22日

便秘になりがちなの時期

天気予報では明日から恵みの雨の様ですが

今日まではカラカラの乾燥でした

その為

便の不調をうったえる患者さんが

いつもより多かった気がします

気温も下がり水分が飲みづらくなり

ついつい水分摂取量が減ります

加えて

外出先だとマスクもあり外して飲むのが・・・

とついついもありますよね

更に寒さにより内臓が下垂して血流が悪くなるので

消化吸収能力が落ちてきます

踏んだり蹴ったりですね 笑

まずは 3S（水分補給 睡眠23時 深呼吸）をしつ

かりいつものペースに戻すことです

そして ゆたぼんと

自分にあう乳酸菌を探し食後に摂取してください

小便の回数もチェックしましょう

今日も笑いながら行きましょう

「江上浩二の独り言」 39 江上浩二

ギメの日本美

私の独り言は自然に内なるところから湧き出るものでなく、何か外からの刺激があつてそれに反応し、結果として表出してくるものが多い。令和三年一月二十日の深夜番組NHKのBS放送（後で調べたのだが、二〇〇三年に放送された番組の再放送）を観て眩きたくなつた。

明治九年に仏より来日したエミール・ギメという若い実業家が日本中の仏様（ほとけさま）、仏像の類と幕末から明治維新の時代に書かれた絵図を収集し（対価の金銭を払い購入した）、仏に持ち帰り自分の美術館を建て、保存保管していたという内容である。

幕末に和蘭（オランダ）や英米人が来日し、浮世絵や江戸の郊外、谷中巢鴨辺りの植木を買い集め欧州へ持ち帰った話など多い。また、明治になって経済的に困窮した旧大名、旧家が手放した物品も欧米へ流出した。

よく宿題みたいに本を読んだ感想とか映画を見た印象

を文章にしてくれと言われても、子供たちは本当に良かった、素晴らしかったと体感できて、それを文章にしると言われても、なかなか出来ないものだ。この深夜番組も感動が先で、後で文章にした少し作業的になつてしまふが、その感動を少しでも残したいという私の意図がある。写真、絵などを省き、その感動を文字だけにしたためてお伝えすることは一番の難題と分かっている。

TV番組の場合はこれでもかこれでもかというくらいに鮮明な映像を見せつけてくれるが、ギメが収集した大小の仏像、木造・青銅製の仏像だけでなく、番組では一般庶民が所有していたと思われる大黒様に焦点を当て、ギメが多種多様の日本美として受け入れた仏像を紹介していた。廃仏毀釈で不要とされた「日本の美」を日本人は簡単に処分してしまったのである。

驚くことには、法隆寺にあった仏像、目黒の行人坂先にある幡籠寺の丈六（高さ四・八m）、青銅製の阿弥陀如来像まで収集し、残念だが三分割されて仏まで輸送され、今でも博物館で保管管理され、日本美として鎮座している姿が紹介されていた。しかし、三分割された切り口は痛々しかった。法隆寺より流出した国宝級の仏像（脇侍・勢至菩薩）は近年里帰りし、主の仏像（阿弥陀仏）と合

わせて三体が一緒に写真に収まっていたが、流出した経緯は不明のままである。記録によるとギメは中国の仏像として購入したらしい。

さらに関連の仏像を紹介説明している書物まで収集し、その書物を求めたであろう日光にある骨董店にまで取材に出かけ、十二代当主になる浅倉屋・吉田文夫氏の話も番組で取り上げられ、ギメの日本美に対する探求心のようなものまで掘り下げていた。

今回のNHKのこの番組は著名な写真家が仏にあるギメの美術館、生家を訪れるのだが、あまり番組の内容や私の感動体験をリードしてくるものではなかったので、敢えてお名前は記さなかった。実際、ギメが訪れたであろう日本国内の地を番組の為に巡られた日仏外交研究家クリスチャン・ポラック氏は温厚、静寂感、ゆったりと喋る日本語は十分受け入れられるものであった。

最後に、ギメが気にいった武者絵師の河鍋暁齋にモデルになつてくれと依頼し、同行した画家・レガメが河鍋像を描き始めたところ、河鍋もじっとしながら暇だったので、筆でささっとレガメ像を描き上げてしまったという笑い話みたいなことも番組で取り上げて、私はその部分が一番印象的であった。ギメに同行した画家・レガメ

の描く河鍋は銅板エッチングのような細い線の集合体として硬く感じたが、河鍋の日本美は、非常に速く走らせる一本の筆で描く墨の濃淡、筆の力具合で変わる太さの集合体からなる人物像であった。

追記、東京ステーションギャラリーで二〇二〇年十一月二十八日から二月七日まで開催されている「河鍋暁齋の底力」展を一月二十七日に偶々知る。是非二月に入つて訪れてみたいと思う。一月三十日記す。

漢詩研修 (五十三)

千代田岳精会 平井茂行

絶句

杜

南

江碧鳥逾白
くみどりにとりいよいよ
く

山青花欲燃
やまあお
はなもえんとほつ
す

今春看又過
こんしゅん
みすみすまたす
ぐ。

何れの日か是れ
いす
れのひか
これ
帰年
きねん
ならん

【作者】 杜甫（七一二～七七〇）盛唐の詩人。李白とともに唐代最高の詩人。字は子美、少陵と号した。襄州襄陽（湖北省襄陽県）の人。洛陽に近い河南省鞏県の生まれ。祖父は初唐の詩人杜審言。三十五歳ごろまで、呉・越・斉・趙の間を遊歴。この間に、李白・高適と交わり詩を賦したりしている。また、進士の試験を受けたが及第せず、長安で困窮の生活を送った。天宝十年（七五二）「三大礼の賦」三篇を奏上して中書省集賢院の侍制に任ぜられたが、官位は与えられなかった。

【語釈】 ※絶句：絶句は詩の体を言うのであり、したがってこの詩は無題とゆうのと同じ。なお、杜甫には「絶句」と題する詩が数首ある。

※江：此処は成都の街を流れている岷江をさす。成都のあたりでは錦江という。

※碧：濃いみどり。エメラルド色。

※欲然：「然」は「燃」と同じ。「欲」は「将」と同じで、燃え出さんとするばかりの意。ここは山の緑に映えて花の紅が燃えるように鮮やかなこと。

※看：みるみるうちに。手をつかねてどうしようもない感じを表す。

※帰年：故郷に帰ることの出来る年。

【通釈】 錦江の水は深いみどり色に澄み、そこに遊ぶ水鳥はますます白く見える。山の木は緑に映え、花は燃え出さんばかり真赤である。今年の春もみるみるうちに過ぎさつてしまおうとしている。いったい、いつになったら故郷に帰れる時がやってくるのであろうか。

『西光院』

中屋保之

「今年は、鐘の音がしないね」

例年通り、新年を我が家で迎える息子一家と年越しそばを食べていた時の息子のひと言に、はたと気づかされた。いつもの除夜の鐘が鳴っていない。新型コロナナ蔓延防止の影響なのだろうか。近所にある『西光院』は、いつのころからか鐘を突きに来た老若男女がすべて突き終わるまで鐘楼を開放してくれていた。私がこの寺が好きな理由の一つである。



団塊の世代と呼ばれた私たち「悪童」の格好の遊び場でもあった。山門前にある椎の大木は、樹齢四百年以上とも伝わり東京都板橋区の登録文化財に指定されている。この太い幹によじ登り、落雷で空いたと謂われる空洞をのぞき込んでいて大人たちの注意を受けたり、夏の夜、裏手にある墓地に肝試しと称して少し年高のお兄ちゃんと一緒に恐る恐る踏み込んだガキどもも、今やいい歳のジジ・ババになっている。

阿弥陀如来像をご本尊とする「醫王山薬園寺西光院」は、真言宗豊山派の寺である。東京都社案内のHPによると、『西光院の創建年代は不詳ですが、覚慧かくゑが開山となり創建したと伝えられ、また本寺根生院の過去帳に「法師是空元和二丙辰年二月寂（一六一六）」との記載があり、江戸時代初期に創建したと考えられます。豊島八十八ヶ所霊場の八十二番、板橋七福神大黒天が祀られています。』とあるので、かなりの古刹である。

平成二十六（二〇二六）年六月、母が他界した。体が動かなくなる直前まで、西光院で働かせていただいたご縁にすがって葬儀をお願いした。

我が家は曹洞宗であるにも関わらず二つ返事で引き受けて下さったのは、ご住職の鈴木道雄みちお師、私たちより少し年長の「みっちゃん」でしかも導師を務めて下さった。同じ年の十月に父が母の後を追って逝った際にも西光院でお世話になった。更には、翌年の八月に妻が私の誕生日に旅立ってしまったのである。さすがに参った。相談に伺った際の奥様をはじめとしたお寺の皆さんの心遣いに感謝しつつ何とか執り行うことが出来た。時折、散歩の途中で本堂前で手を合わせるのだが、すっかりご無沙汰状態で何とも申し訳ない限りである。この号を持ってご挨拶に伺おうと思案している。



春來たるはるき

桜台楼主人

昨日さくじつ 孤桜こおう 晚霞ばんかに 寂せきたり

今朝こんちよう 千朶せんだ 萌芽ほうがを 見みる

素雲そうん 乱点らんてん 徒いたずらに力つとむること 勿なかれ

夜夜やや 杯さかずきを 挙あげて 静嘉せい加を 愉たのしまん

春來 見臺櫻萌芽

昨日孤櫻寂晚霞 今朝千朶見萌芽
素雲亂點勿徒力 夜夜舉杯愉靜嘉

(語釈) ○弧櫻：テラスを掩っている桜。山桜系の桜であり、先ず芽が出て、その後花が咲く。(臺櫻はテラスの桜)

○素雲：白っぽい花の桜が咲いた様子。○乱点：花の乱れ散ること。○靜嘉：清らかで美しい。

※テラスの山桜が一齐に芽吹いた。

年の暮れは黄葉を一杯に付け、そしてごく短期間で揺落した。

私はテラスに散り落ちた落ち葉を二月までそのままにした。

テラスには、私のささやかな書齋を通つて干された洗濯物が絶えない。

この冬は記録的な好天が続いた。枯れ葉は洗濯物の下で、冬の陽光にいつまでも照らされていた。昔の懐かしき風景を見るようである。

この桜木を春夏秋冬、一年を通して観察していると無意味な姿はない。

冬は余計なものをつつぱり切り離して、じつと耐え、時が来るのを待つ姿そのものである。

春が来た。

すごいものだ。今にも弾けそうな膨らみが一夜にしてぱつと芽吹いた。先ずはやわらかい芽を出して、同時に白
い花の蕾を抱いている。生命が一齐に活動を始めたかのようなだ。

これからは早い。点々と柔らかい緑がいい。そして白も良い。山桜は質素だ。

この上は咲き急ぎ、散り急ぎをしないで欲しい。夜ごとに私は杯を挙げるのだから。

やはり春は桜かな。とにかく乾杯!

平成十一年三月二十二日記

横山精真

西行庵を尋ねるさいぎょうあん たず

今泉由利

一春いつしゅん

破蕾はらい

夢醒の時ゆめさむるとき

高詠こうえい

追懷ついかい

歌聖の姿かせいすがた

但歩たんぽ

行尋こうじん

幽谷の裡ゆうこくうち

草庵そうあん

到り得いたえ

桜花耀おおかかがよお

尋西行庵

一春破蕾夢醒時

高詠追懷歌聖姿

但步行尋幽谷裡

草庵到得耀櫻花

(語釈)

破蕾―蕾が開く

追懐―なつかしくしのぶ

但歩―ただひとり

行尋―たずねてゆく

(詩意)

歌聖をしのび、深山幽谷：ひとりゆきゆきて

桜花につつまれた西行庵にであえた。

芭蕉と子規6

夏目勝弘

子規は最上川の船便の乗り場に着く、船は翌朝とのことここに泊る。

○すゞしさの一筋長し最上川 子規

○ずん／＼と夏を流すや最上川 子規

○蚊の声にらんぶの暗きはたこかな 子規

船に乗り酒田に向う

○西吹くとかこのいふなりけさの秋 子規

○秋立つや出羽商人のもやひ船 子規

廻り来る舟の網を引き岸を歩む人蟻のごとしとあり。

○舟引きの背丈短し女郎花 子規

○蜻蛉や追ひつきかねる下り船 子規

船上より

○瀬の音や霧に明け行く最上川 子規

○鶴鶴のあらはれそめて山けはし 子規

○朝霧や四十八瀧下り船 子規

清川にて舟を降りる。戊辰戦争の故蹟とか

○蛸の二十五年も昔かな 子規

葦原のなかを行き酒田に着く。酒客を招く店數十戸あり。

翌朝下駄を捨て草鞋を穿き、北、鳥海山を正面に見て。

○鳥海にかたまる雲や秋日和 子規

○木槿咲く土手の人馬や酒田道 子規

眼をさへ／＼するものない、吹浦に沿い行く。

○夕陽に馬洗ひけり秋の海 子規

象潟は昔の姿にあらず。社殿を假りて眠る。

芭蕉が象潟を訪れてから、百十九年に一瞬にして陸地となつてしまつた。

体力の衰えいぢるしく、日記には「木蔭と見れば頻りに行李を卸す」

とあり

○喘ぎ／＼撫し子の上に傾けり 子規

○消えもせでかなしき秋の螢かな 子規

なお二更近きころ本庄に着く。

色衾の格子の内を覗く著者の胸の内ひたすらうとまし。

○骸骨とわれには見えて秋の風 子規

くたびれはて旅店に宿を請ふも、二軒三軒四軒と空部屋なし、警察署を

煩し一軒の宿に。

翌朝市の中を過ぎて出で立つ。

○籠のこき紫や桔梗売り 子規

○朝市や鯛にかぶさる笹の露 子規

初秋の天炎威未おさまらず熱しと、風流は苦しきものと、松陰にて荷物

を枕に、幾度ぞ

○草枕わが膝に来る蜻蛉かな 子規

日の高いうちに着る、翌日は足をいたわりて馬車にて秋田に着く。翌日は

人力車にて八郎湯へ

○秋高う入海晴れて鶴一羽 子規

秋田を立ち鳥海山を正面に行き戸島で人力車。

○草花や人力車走る秋田道 子規

大曲に泊り、岩手への新道を辿り峠へ

○蜻蜒を相手にのぼる峠かな 子規

峠道を幾曲りしても、下に見えている茅屋になかなか着かない。

○蛸や夕日の里は見えながら 子規

麓に下り暮れはてた道を二里辿り、湯田温泉へ、客の満ち泊るをことわ

れるも、強いて請い台所の片隅にて二夜

○秋風や人あらはなる山の宿 子規

○山の温泉や裸の上の天の河 子規

夜汽車にて東京に向う

○背に吹くや五十四郡の秋の風 子規

○白河や二度越ゆる秋の風 子規

正午上野着

○無事祝ふ二百十日の案山子かな 江左

○秋風や旅の浮世のはてしらす 子規

はて知らずの記、ここに盡きたりとも誰れか我旅の果を知る者あらんや、

と。

「氷魚」のことから (242) 岡本八千代

世界中が、日本も新型コロナウイルスに侵^{おか}されて、苦しんでいる真つ最中。この三河の海の西浦の町でも自分を守るのに緊張の日がつづく。特に老人は外出禁止である。

今日も私はせめて庭に佇つ。驚いたことには、あの百花繚乱の白花ダチュラも全部萎れて今にも地面に落ちてしまうほどの垂れ姿であった。花も老いればこの姿か。人間と同じなんだ。今の私の老い姿と同じじゃないか。しかたがない。これも自然法爾の姿なのだ。

こうした環境の中で、茂吉先生のことを書く。今回は、茂吉先生の父君のことを書く。

私には、結城哀草果の著した「茂吉とその秀歌」という本があった。昭和47年に発行された本である。なんとなく嬉しい。……

その本の中は、「茂吉先生の父君」という頁があった。果してどんなお父上であつたらうか。(箇条書にしてみる)

●物事に対して非常な勉強家であつた。

●一度思い立たれた事は、途中で止めて了うようなあやふやなことは決してしなかつた。

●どんな苦難に出逢つても強い持久心をもって成し遂げて行つた。

●お父さんは、絶倫な精力があつたと思う。と言われている。

茂吉の生家は、山形県南村山郡堀田村金瓶部落にあつた。山裾には須川という川が流れている。その川に沿う雑木山の

裾に、萱屋根家屋に白壁の土蔵が点在する百五十戸ほどの部落が金瓶である。山形市から上山町に通ずる細道の早坂新道が、ようやくのぼりになるところに茶屋があつて、そこから細い路に別れる。その路を一二町鉄道線路に沿つて歩み、線路の下をくぐつて、この細い道は部落と国道を結ぶ間道であつた。川岸には山漆、しおで、萱などが茂り、小鳥が巢をつくつた。橋を渡ると二十本ばかりの老杉が群立つて、萱葺の寺がある。寺と向い合つて社があり、五六本の杉が立っている。寺の上手に御堂を圧するように五間に十二間位の総二階の茅葺の大きな邸宅がある。この邸宅が守屋伝右門という家がある。これが茂吉の生家であつた。

茂吉のお父さんは、剣術柔術角力その他の力術に熱い愛着と理解とを持つておられた。

●槍先三尺向うのろうそくの火を、アツという気合一つで消してしまう見事な槍の妙術をもつておられた。

●角力や外人の剛力などが巡業に来ることがあると、高い入場料をはらつて、特等席に控えられて熱心に観ておられた。

●人間が諸々のみにくい雑念妄想から離れて清い信仰の生活に入るには群心集中の修業をきわめねばならぬと考えられ晩年一身を念佛三昧の生活にささげられた。

●朝は二時か三時の夜明けまで一人倉座敷の仏壇の前に静坐されて念佛に余念がない

このお父上あつて、茂吉は育てられていったのだつた。そして、父上は心から郷民に親しまれた人であつた。その父に育つた茂吉であつた。

編集室だより【二〇二二年一月】

今泉 由利

○田道間守命たぢまりのみこと、朝鮮新羅の王子を祖先にもつ。垂仁天皇の命を受け、常世の国、不老不死の「非時香菓」橘の「実」を探しの旅にでた。天皇は、日本国民の幸せを願ひ、この木の実を、日本に定着させようと考えられたと「日本書紀」による。

○明治の時代の開業医だった祖父は、診療室や病室の奥の庭に、いろいろな種類の「非時香菓ときじくのみ」、橘を祖先とする柑橘類を植え、患者さんや、近所の人達が自由に取ってゆかれるようにと。夏みかん、ざぼん、甘夏、橙、金柑、柚子、デコポン：などなど。みんな大好きだけれど、特にデコポンが好きで、今に至まで、デコポン漬になっている。

○ミカンに含まれる、クリプトキサンチンは、ガン予防が期待され、活性酸素を抗酸化物質と、抑制する。骨代謝、脂質代謝に関わる遺伝子の発現を促進する。ビタミンCを豊富に含んでおり、風邪予防に効果。クエン酸を含み、体内の酸性物質を減少、疲労回復、血をきれいにする。ペクチンが多く含まれ、整腸作用あり。

○小学二年生の頃、父と母が「東京を知らなくてはいけ

ない」と、春休みを利用して、すぐ上の兄と私と弟、両親。汽車に乗って、東京を目指した。余中、車窓に、はじめて見る本当の富士山があった。右肩少し下に、段があり、そこから煙が立ち登っていた。噴火のなごり噴煙と知る。そこで、父は教えて下さった。

富士山を望む歌 山部宿祢赤人
田子の浦ゆ うち出てみれば ま白にぞ 富士の高嶺に 雪は降りける

山部宿祢赤人望不尽山

天地之 分時徒 神左備手 高貴寸

駿河有 布士能高嶺乎

天原 振放見者 度日之 陰毛隠比

照月乃 光毛不見 白雲母 伊去波伐加利

この和歌のまっただ中に居ることに、びっくり、そして、この景観を、こんな風に表現する素晴らしさに「いつかきつ」と心したのだった。

○骨身を惜しまず、請求書というものは書かなかった祖父。父が医家を継ぎ隠居生活になってから、みかん畑のもっと奥で、野菜や草花の菜園をしていらした祖父の後を、追いかけるのが私の日課でした。農作業中、「本当は、野口英世のように、外国へ行つて、医学の研究をしたかったんだよ」と祖父。私にすっかり残った「大切」です。

野菜・果物・まんだら (37) ロサ・モスケータ (ローズ・ヒップ ジャム) Patagonia Berries



アルゼンチンの南極にほど近いアンデス山脈のふもと、空気も水も、生まれたままの清らかなパタゴニア地方。

パタゴニア地方独特種、野性のバラの果実をさとうきびの蔗糖で炊き上げた無添加ジャムです。

ビタミンA、B、C、D、E、P、ベーターカロテンなどのビタミン類、カルシウム、鉄分、植物繊維、ペクチン、また抗菌作用で知られる抗酸化物質のポリフェノールが豊富に含まれます。

ヨーグルト、アイスクリーム、パン、クラッカー、などに添え、また、ケーキ作りに、パンケーキに、ワッフルなどにも…。甘酸っぱい野バラの感触。

地球の上の国と国と、言語、習慣、歴史、政治…細かく異なるのだけれど、人と人との関係では「何とかなるだろう」と、呑気なことでアルゼンチンに着いてしまった。そして、人と人としてであっても異なった言葉は通じ合わないことに、びっくりするのだった。どうしたら良いのかの日々は、家に籠り絵や図案を描いていた…、それでも「スペイン語を習おう」と思い立った。

スペイン語を教えてくださいの先生のルシータさんが来られ、勉強より先に「絵を持ってついていらっしやい」と言うらしい。三ヶ所目くらいに行った先が室内装飾グループの画廊、オーナーがセリーナさんだった。

セリーナさんは、一生懸命泣かないでいる私を、その出会で引き受けてしまわれた。マチス、ピカソ、オナシス、マザー・テレサ…とにかくすごい人達のすぐ近くのセリーナさんの、彼女の生活に私を引き入れてくださったのだった。

アンデス山脈の麓、山と湖と、清麗なバリローチェへも、セリーナさんと旅をした。空気が美味しいことがはっきりわかり、山も空も美しく神々しかった。アンデス山脈の雪解けの湖。湖に落ちたものは、深く深く、限りなく沈んでゆくのだという、浮力のない湖。

その湖の辺に、野生のバラが棲息していた。

セリーナさんが、小さなバラの実を指し「ロサ モスケータ」ビタミン、ミネラル、カルシウム、鉄分、ペクチン、その他様々な人に必要な栄養素をたっぷり含む美味しいジャムになることを教えて下さった。宿った「ジャオジャオホテル」の朝食に、そのバラの実ロサ モスケータのジャムをいただいた。未知であった味は、おいしさ、好ましさ…わたしの身体が記憶した。

アルゼンチンの習慣は、朝食のパンに必ずジャムが要る。セリーナさんの食卓もロサ モスケータや2～3種類のジャムが用意されるのだった。

明治神宮春の大祭奉祝献詠歌募集要項

- 一、献詠歌 未発表の近詠（一人一首厳守）
二、用紙 はがきに限る

献詠は楷書にて書き歴史の假名遣を用いる（小・中・高校生は現代假名遣）郵便番号・住所・氏名（ふりがなを付す）・電話番号・年齢を明記（小・中・高校生は、校名・学年も記すこと）
令和三年三月五日（金）必着

- 一、締切日 春日いづみ・小池 光・佐伯裕子・坂井修一

- 一、選歌発表 五月九日（日）歌会当日 於明治神宮会館（敬称略五十音順）
一、賞 一般 特選 入選 二〇名 記念品贈呈
佳作 一七〇名 記念品贈呈
佳作 若干名 記念品贈呈

- 一、送り先 小・中・高校生 秀逸作 若干名 記念品贈呈
明治記念総合歌会係 電話〇三二三三七九一五五一

- 一、献詠歌奉奠奉告式
1日 時 五月九日（日）午後零時三十分

- 2場 所 明治神宮御神前
一、第百四十四回明治記念総合短歌大会

- 1日 時 五月九日（日）午後一時
2場 所 明治神宮会館（予定）

- 3 歌会内容 入賞歌発表・表彰・選評
【講演】連続短歌講座《近現代歌人の家族詠 第五回》
一秋 遥空―人間を深く愛す― 講師 秋山 佐和子氏

- ◎ 会費不要
☆来会者には作品集を贈呈致します。
☆作品集郵送ご希望の方は切手三百円分同封の上、お申込み下さい。

- ※特選・入選・佳作・秀逸作に入賞の方には短歌大会前に予めご通知致します

主催 明治記念総合歌会
電話 〇三二三三七九一五五一

「三河アララギ」について

◇三河アララギ発行所 〒一四・〇〇二二
東京都北区王子本町一・二六・六・A
TEL (〇三) 五九二四・二〇六五

◇URL <http://imazumiyuri.jp/>
E-mail yuritimazumi@jcom.zaq.ne.jp

◇編集・発行 今泉由利・森岡陽子

◇三河アララギ誌は毎月発行します。

◇会員・今まで会員の方。希望される方。

◇会費制 廃止。

◇新しく購読を希望される方 一ヶ年五千円。

◇振替口座 〇〇八三〇・六・五六二二九

◇原稿送付先 〒一四・〇〇二二

東京都北区王子本町一・二六・六・A
今泉由利 宛

◇原稿は毎月末日までに郵送下さい。